

し、斯邦にも、仁明帝自ら五石を煉給ひし事あり、三條院金液丹をめしたり、其薬くひたる人は目をやむと、大鏡にみえたり、平相國の身火のやうになりたるも、已に富貴きはめつ、若くは欲にあかずして、乳石の劑を服せられし歟、夫唐土の州域は、南北甚廣し、北土の病風寒によるなれば、熱薬よろしかるべけれど、南土の人は、風寒の病少く、濕熱の因多し、これによりて、南北經驗の説出たり、大成論には、病門毎に暑濕をいひて、風寒の二因ばかりにか、はらず、我邦は、唐土の南土に近く、人民卉服して、喪服せず、されば風寒の病少く、濕熱の病おほかるべきなり、天文醫按、春の末まで、熱氣なり、まはぶき出すいはな出れば、風を引候やうに、こゝろへられ候、大にひが事に候、冬に候は、いせめてなり、又あつき物を好候ものも、煩によりて、熱氣にも、其分候當世は、寒の者百人の内一二人もなく候、是は風寒濕の因をとりず、病は皆熱とせし説也。

〔斷毒論〕斷毒論序

昔日、吾門人山本寬之患血證、予屢視之、而觸其氣、喀然吐血、於是始悟、凡百之病、莫不傳染、時告諸吾徒、莫信之者、後門人倉士寬、又患血證、其妻與其父之妾、看護之、亦同吐血、至此始服予言之驗矣、予因語之曰、百病無傳染之理、則痘癩微疥、何可傳染乎、痘癩微疥、已有傳染之理、則凡百之病、何不可傳染乎、是事理之最易知者、而世人不察耳、甲斐醫生橋本伯壽、使其子力作、來從學予、且請序其所著斷毒論、予閱之、則能言百病傳染之理、與予所見暗合、而冥契可謂奇矣、其論百病屬諸外氣者、其言精矣、略要之、伯壽在草澤之間、奮其獨見、而不倚他人之門牆、則是醫中之一偉人、所謂鐵中錚々、傭中佼佼者也、黨同伐異、恒人之情、世之醫流、或驚其言之異、群論而聚訟之、則此書藏之名山、傳之通邑大都、均是待後世之子雲耳、

文化辛未〇八閏二月望

吉田儒員加賀大田元貞公幹撰

〔斷毒論〕總論

經曰、夫二儀之内、惟人最靈、稟天地精英之氣、故與天地相參、蓋與天地相參之故、與天地一也、與天地